



# C.P.I. Mates

NO.61

2003. 12. 20

The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979

## 里子新聞は、一月にはお手元に届きます

インドネシア里子新聞第一号、スリランカ里子新聞第二号は、12月発行を目標にしていたが、現地の記事集めと編集に時間がかかり、ずれ込みそうです。クリスマスまでにお届けしたかったのですが、残念です。鋭意作業を進めていますので、今しばらくお待ち下さいますようお願いいたします。

◎下の図が、新しく発行される、インドネシアの里子新聞のタイトルです。

“クルアルガ”とは「大きな、暖かい家族」の意味をもったインドネシア語です。

たしかに個々の手紙をなかなか（習慣にないためか）書けない里子たちですが、顔をあわせると、「里親さんたちと私たちは大きな家族」と微笑んで、一所懸命にここを通じ合わせようとする彼らの気持ちを、どうかこの新聞で知っていただければと願っております。

The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979

C.P.I.Mates おおきな かぞく

2004-1  
No.1

クルアルガ BULLETIN NEWS

特定非営利活動法人 C. P. I. 教育文化交流推進委員会  
発行所：C. P. I. インドネシア事務所  
c/o: PPKIJ  
(PUSAT PENDIDIKAN DAN KEBUDAYAAN INDONESIA-JEPANG)  
Jl. Mampang Prapatan XV No. 36D Jakarta Selatan 12790  
本部：東京都三鷹市中原 2-16-9 Telp. 0422-49-3808  
Email: [cpi\\_mate@muh.biglobe.ne.jp](mailto:cpi_mate@muh.biglobe.ne.jp)  
URL: <http://www.cpi-mate.br.jp>

◎ 7月に発行された スリランカ版“ストゥーティ（ありがとう）”のコピーです。

こちら、第二号を編集中です。会員の皆様からの嬉しいはげましの便りに感謝します。

C.P.I.Mates The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979

No.1  
2003.7

ストゥーティ ありがとう

お母さん、お父さん ありがとう

“社会の役に立つ人間になりたい”  
ナーリカ・ディレルグン・グナラトナ(女子15才)  
教育は人の将来を左右し、人生を成功に導くものです。そうした将来の成功の為に貧しい家庭の私た

“発刊にあたって”  
お互いを理解する  
奨学金を与え、スリラン  
さる日本の里親さんたち  
かげで今まで四千五百人  
ました。現在も千七百人  
は、この制度を通して日本

## ご挨拶にかえて



### “Change”こそが大切だと痛感しました

年の瀬を迎えお忙しいことと存じます。本年から会報を里子新聞と本部報告とに分ける試みをしました。インドネシア発が遅れてすみません。

2003年は、私にとりまして、ずいぶん勉強した年でした。写真にありますのは、貧しい民衆で村の生活向上を村人にすべてまかせたプロジェクトの視察を行ったときのものです。

村の責任者たちだけでなく、女性たち、若者たち、そして子どもたちが、それぞれの地域の夢を描き、発言の場と責任を自覚していたのは感動的でした。

実際に多くのCHANGEがおきています。

貧困の村から学べることは山のようにありますね。

会長・小西菊文

表紙・里子新聞発行の予告	_____	P 1
会長あいさつ 本誌の目次	_____	P 2
評議員会の報告	_____	P 3～5

全国の地域代表の意見が運営に反映されるのは、C.P.I.の組織の強みです。

遠方から多数お集まりいただき、感謝を致します。

目下、評議員会で選ばれた「まとめ部会」で建議をまとめて戴いております。

スリランカとの協議報告	_____	P 6
-------------	-------	-----

C.P.I.スリランカ事務所が、スリランカ政府に登録の運びとなりました。

学校間交流に参画されたい方へ	_____	P 7～8
----------------	-------	-------

「スリランカ学校間交流訪問記」はページ数が多く、地図・写真入りで、すてきな仕上がりです。本部から e-mail でお送りできます。

お申し込みください。 [cpi\\_mate@muh.biglobe.ne.jp](mailto:cpi_mate@muh.biglobe.ne.jp)

## インドネシア特集

インドネシアとの協議報告	_____	P9
インドネシア里親増えず資金ピンチ！		
今年度と来年度の対処方法を協議しています。	_____	P10～11
里子卒業者をはじめとする雇用創出の		
ため、現地政府・PPKIJと協議していること。	_____	P12
NGO ネットワーク視察とCPI現地活動の報告。	_____	P13～15
寄稿「インドネシアの里子を訪ねて」	_____	P16

出張日: 2003年8月16-25日

C.P.I.小西会長:会務

出張者: 山川事務局次長:会務

(財)自治体国際化協会(CLAIR) 酒井裕史(主査):日本政府総務省からC.P.I.活動の取材

同行者:ブルーチップ・コンサルタント /大木健司(社長):協力予定者としてボランティア参加

### 今回の行動目標(1)~(6)

概要: (1) CPI-SNECC の協働およびC.P.I.Sri Lanka Officeの現地政府登録の件など

・1月の合同協議の内容のうち、SNECC施設および薬草園について、C.P.I.からの協力が無い件をSNECCが申し入れ、C.P.I.側は、施設が相変わらず「日本人宿泊所」をタイトルになっているため、公的補助を受けられないことを指摘し、そのタイトルで計画するなら個人寄付しかないと示唆。薬草園については「一月協議どおり3段階に分けた提案書を」と再度要請しSNECCとから了解を得た。  
・今後の協働体制を円滑に進めるために、SNECCとC.P.I.との間の包括協定を改めて作ったほうがよいとの提起がSNECCがあり、C.P.I.から先に詳細ドラフトを入れて欲しいとのSNECC側の依頼があった。

※12月SNECC理事会は、上記協定に拘らずC.P.I.スリランカ事務所登記に協力すると署名。

C.P.I.が日本政府との新しい協働資金、寄付控除法人資格を円滑に得るうえで前進である。

名称: Sri Lanka Liaison Office of C.P.I.Japan とする。SNECCは、早急に登記を推進する。

住所: C/O SNECC in Mahindaramaya Mahinmarama Road, Etul Kotte, Kotte (永久住所とする)

C.P.I.スリランカ事務所は、C.P.I.本部が決定した以外の活動をする事はできない。

C.P.I.スリランカ事務所のスタッフは、C.P.I.とSNECCで話し合って決める。

C.P.I.とSNECCは各々毎年理事会から4名を選抜し共通のまたは相互の活動を理解し協議する

(2) 里子新聞編集の件

・里子新聞の充実には、里親・里子間のコミュニケーションを飛躍的に改善するものであり、里親会員へ喜びが増せば新規会員の増強に繋がる大切な事業であることをお互いに話し合った。

・PCが事務用であるため、自由に使えない。専用機が必要であり、フォロー要請があった。

・印刷所に日本語ソフトがないため、センターで版下原紙(透明版)をプリントする必要。  
そのためにレーザー・プリンターが必要である。この購入を要請された(約40000Rs)。

(3) 里子調査、インタビュー(実践研修)

シーベリ書記が急用(お葬式)で参加できず、高堅氏とナーラダ坊さんが、実践研修に同行した。  
Kotteセンターほか4ヶ所で8人の様々な事情を抱える教育里子、親、会社上司に話を聞いた。

※ この内容については、次号の里子新聞「ストーリー」に掲載される予定である。

(4) 紅茶のフェア・トレードの可能性の調査

紅茶のエステート、工場、製品化の一貫した視察を行った。

日本の市場への投入(品質、パッケージ、コンセプト、価格など)は、コンサルタントのブルーチップ・コンサルティング社(大木賢治氏)の感覚を参考にしたが、日本の流通事情を考えると簡単ではない

(5) 日本政府も協力している地域開発の視察(ラトナプラ地域の活性化)

北部・東部の復興とともに、いま最もホットなコロombo=ハンバントータ間の重要拠点であるラトナプラ地域の開発が脚光を浴びつつある。その一方、スリランカ有数の水害頻発地域でもある。被災里子見舞いしつつ視察。地域開発大臣にも会見、日本のJBIC(国際協力銀行)の協力の様子など見学し

(6) 日本政府総務省外郭法人CLAIR(自治体国際化協会)からのC.P.I.活動調査に対する協力

総務省では全国の自治体の国際化を促進するために、NGOとの連携を推進中とのこと。

現地視察による取材の第一号としてC.P.I.が選ばれ、CLAIRの酒井氏が我々に同行取材。

12月に刊行される機関紙に掲載され、全国の自治体に配布される。

C.P.I.としては、地方自治体との協働・学校間交流などの活動で強力な材料になる。

《以上》

## 資料⑥ 学校(教育)交流についてのスリランカ訪問報告 (会務)

### 〈こどもたちの心に友情の種をまこう〉

学校間交流担当 鈴木康夫

#### 1 訪問期間 2003年11月1日～13日

#### 2 今回の訪問のねらい

日本の交流校からの資料を持参して相手校に渡すとともに、交流のあり方について協議し、今後の望ましい交流のあり方の資料とすることを主なねらいとした。

また、新たに交流を希望する学校があれば訪問調査をする用意もした。

#### 3 訪問学校

- 11月1日(土) 成田13:20 UL455便 コーッテセンター泊
- 11月2日(日) センターで打ち合わせ後、ヌワラエリヤへ移動。
- 11月3日(月) NU/SHANTHIPURA 校を訪問。
- 11月4日(火) K・WALLAHAGODA 校を訪問。
- 11月5日(水) MAHA SARASVI 校を訪問。
- 11月6日(木) 首都コーッテの C.P.I.事務所 (SNECC との共同施設内) へ移動。
- 11月7日(金) エルピィティアセンター訪問。水害の跡を視察。幼稚園建設現場の視察。
- 11月8日(土) ポーヤデイ (仏教伝来の記念日) の様子を見学。
- 11月9日(日) 日曜学校で子どもたちと交流、授業を見学。
- 11月10日(月) ANANDA SATRALAYA 校と ISIPATHANA 校を訪問。
- 11月11日(火) ANANDA BALIKA 校と SRI RAHULA 校を訪問。
- 11月12日(水) 障害児の教育施設を視察。

「スリランカ学校間交流訪問記」はページ数が多く、内容も地図・写真入りで、すてきな仕上がりです。本部から e-mail でお送りできます。

次のアドレスまで、お申し込みください。 [cpi\\_mate@muh.biglobe.ne.jp](mailto:cpi_mate@muh.biglobe.ne.jp)

#### 3 現地では、つぎのような教師のいる学校を選びました

- (1)教育里親一里子活動に協力している学校 (面倒みをきちんと行う、以下のような教師がいる)
- (2)日本の文化や教育に関心があり、交流を通して子どもたちのさらなる成長を望む学校。
- (3)自国の文化を大切にしている学校。
- (4)教育里子が現在も在籍している学校が望ましい。
- (5)できれば、元・教育里子であった教師がいる学校がのぞましい。
- (6)なお、最初はスリランカ教育省の許可が必要な活動なので、誰にでも知られている首都の有名学校を含めてある。私たちは、なるべく地方の、外国の子どもたちと接する機会の少ない学校を選んでいこうと考えています。

#### 4 日本の学校の子どもたちに期待しています

- (1)他国のこどもたちとの交流を通して、他国の文化や日本の文化との共通点や違いを見つけ、それらを尊重するようになってほしい。
- (2)自国をどのように伝えたらよいか自然にわかるようになってほしい。
- (3)相手への協力は一方的なものではないことを、子どものうちから体験させたい。経済的な協力でも、

まず「何が本当に喜ばれるか」を知ることから始められるようになると思います。

## 5 交流の形態は、教師間/生徒間と2種類を考えています。

クラブ活動のような形をつくるほうが、年数を経ても継続できます。

- (1) 交流にかかる費用については、学校負担を原則とする。
- (2) 物品や金銭にかかわることについては、C P I並びにS N E C Cの助言を得ることとする。
- (3) 学期1回くらいを目安に、季節に合わせた学校行事や日本の教育情報をなど伝えたい。
- (4) 交流することが義務に感じて重荷にならぬようにしたい。
- (5) C P I並びにS N E C Cは、子どもたちが互いに「おもしろい」と思い、「知りたい」「伝えたい」という気持ちが育つよう協力する。

子どもたち自身が、すすんで交流のしかたを考えるようになるよう望んでいる。

- (6) ひとつの交流例が、ほかの学校に広がるように望んでいる。
- (7) 情報の交換は、日本からはC P I本部を経由しS N E C Cへ送付、スリランカからはS N E C Cを経由してC P I本部へ送付し、C P I本部並びにS N E C Cはそれぞれの学校へ送付することを原則とする（現在は、担当者として鈴木が行っています）。



- (8) C P I本部並びにS N E C Cでは、交流の記録を保管する。
- (9) C P I本部の担当は、年に2回程度両国の交流校を訪問し、交流がより深まるようにする。
- (10) 交流は、2～3年をもって見直しをするほうがよいと考える。
- (11) C P IとS N E C Cは、連絡を密にし、交流校などの変更や問題があった場合は、すみやかにC P I本部またはS N E C Cへ連絡し対処する。
- (12) 情報を相手国にわかりやすく伝える工夫をするとともに、学校で簡単に掲示できるように様々事例提供を心掛けたい（例えば、絵や写真などを模造紙1枚程度の壁新聞などの添付など）

日本国内の参加希望の学校と、以上のような事前の話し合いを、進めることが大切です。今後実践のなかで、課題を発見し修正を加えていきたいと考えています。

⇒ 教師の立場に立ったときの「交流の価値」（主に日本の教育・文化に係る意見交換）

（ 学校・教師間で、日本で現在実践していることや、これから実践しようとしていることを話し合ってみたらどうか。スリランカの方が進んでいる場合もあり得る）

⇒ 子どもたち同士の交流を、教師が手助けしていけたら素晴らしい

○学校の様子を写真で紹介する

（入学式、校外学習、修学旅行、授業風景、特別教室での授業、運動会、文化祭、耐寒マラソン、総合的な学習、水泳指導、卒業式など）

○作品の紹介(図画、書写、手芸など)

○日本の文化の紹介(日本の遊び、習慣、年中行事、芸術、スポーツ、芸能、住生活、衣生活、食生活、娯楽、祭り、自然など)・・・この項目については、C P Iと学校とが協力して情報の提供をできそうだ。

○子どもたちの手によって、わかりやすい発信交流をできるようにしたい

○将来ではあるが、それぞれの学校に招待し、様々な体験活動を共にできたらと考える(スポーツ、授業、校外学習など)

## 資料② C.P.I.- PPKIJ 2003-2004 年度協議報告

記録：会長 小西菊文

日時 2003年9月7日 14:30—19:00(合同) 20:30—22:00 (PPKIJ 会議で議題3に係る回答)

場所 Marcopolo Hotel 中会議室

出席者 C.P.I. 会長・小西菊文 事務局次長・山川洋一 理事・天沼光太郎

(8月30日理事会により、協議メンバーとして選出された)

PPKIJ 中央委員会から Mrs.Nursy Arsyirawati Mr.Wawan Dewanta

地域リーダー Ms.Andreani(Bogor), Mr.suharno(Cianjur),

Mr.Djadja (Bandung), Mr.Sutikno(Yog-Yakarta)

Mr.Daryono(Semarang), Mr.Madit(Bumiayu),

Mr.Adam(Marang) and Mr.Sakib(Jember)

C.P.I.の小西会長から「遠方の PPKIJ 地域リーダーに感謝する。奨学支援が教育里親の減少で非常に厳しい状況にある中で一層の協働が必要」との挨拶があり、直ちに以下3議題の討議に入った。

議題1. 2003年9月～2004年8月期の奨学制度運営について。

### C.P.I.から教育支援金収入の状況を説明と対策提案：

奨学運営期間：2003年9月—2004年8月

C.P.I.からの奨学運営資金は ¥8,500,000=Rp. 595,000.000 (¥1=Rp.70 で計算)

### PPKIJ からの提案：

今期は、とりあえず新規の奨学生を選ばない。現在の継続奨学生について奨学を維持する。

PPKIJ 運営本部の必要経費 : Rp.170.000.000

PPKIJ 地域センター調査等活動 : Rp.125.100.000

教育里子への直接奨学費 : Rp.300,000,000

(学費1名あたり SMP / SMA Rp.40,000/月×12 大学生 Rp.500,000Rp/6ヶ月×2 )

Total : Rp.595.000.000

議題2. 大学生は、自主財源を確保するための支援に切り替えていったらどうか。大学生が増えて教育里親が増えないならば、中学／高校の学費も値上がりしている中では中学生新規教育里子を支援できなくなる。これでは『中学／高校の奨学制度』という根本が揺らぐ問題が出る。

### 協議結果：

2003年9月—2004年8月の期は、PPKIJ の計画により奨学運営を実施する。大学生の

「自主財源」確保のための『有料塾』については、Yog-yakarta のスティクノ先生が、塾経営15年の経験を活かして各地の状況を踏まえた提案書をまとめ、来期迄に立案する。

議題3. 里親新聞—里子新聞による、教育里親—教育里子間のコミュニケーション向上について

### C.P.I.から PPKIJ にコンピューター10台を寄付する件

C.P.I.から PPKIJ 本部および地域センター9ヶ所に、中古コンピューターが寄付された。

当初目標は、『PPKIJ での統一活動にかかわるコミュニケーション向上』とする。

### 里親—里子新聞によるコミュニケーションに係る説明

インドネシアで発行の「里子ニュース」を11月末までに出せるよう以下のように提案。

1. 費用はC.P.I.の予算で賄う。原稿制作はPPKIJ 地域センターで編集委員を選ぶ。
2. 原稿は英語で作成してもらい、日本語への翻訳は日本で行う。

以上

### 資料③

対インドネシア教育里親活動、里親が増えずピンチ。  
現地の自主財源確保に協力していくことが必要。

C.P.I.は教育里親数が増えない。とはいえインドネシアの学校で教育里子を選ぶニーズはまだまだ高い。そのような状況で15年間協働してきた教師たちを裏切るのは絶対にしたくない。現地9地域のリーダーを招集して対策を協議した。

現状の奨学制度を改革する件に現地地域リーダーたちの意見（⇒資料⑥の結果に至る）

#### Yogyakarta area

- いまの教育里親の増えない状況では、大学生への奨学支援をこのまま続けることは、中学生の新規奨学支援ができない状態につながる。しかし、国立大学の学費が値上がり、大学生は非常に苦しい状況だから、すぐ大学生の奨学金を無くすことは良くない。
- 大変なジレンマの中ではあるが、奨学制度を始めた必要性から考えた支援制度改革をしよう。
- 大学生の自主財源として、彼らによるコンピューター・中高校科目の塾経営を提案したい。

#### Bogor area:

- 大学生による『有料塾』を行っているが、収益が得られてもは中学／高校の教育里子への『無料塾』の費用やその子どもたちの通塾費で消えてしまう。規模を大きくしたい。
- 場所借り料・机椅子など設備・通塾費を支援してくれれば計画しなおせると考える。

#### Semarang area

- 『大学生の自主財源確保』は、きちんとするには、ビジネス的な考え方が必要がある。経営能力の開発も大切であるし、可能性を大学生たちと協議したい。
- 大学1年生および2年生は勉強時間の問題で、自主財源確保活動に参加するのは難しい。

#### Malang area, Jember area, Bandung area, Bumiayu area, Cianjur area

- いま出た意見とほぼ同様。『有料コンピューター塾』も考えたいところだ。プログラムを進めるには、経営的に回るまでに多くの手助けが必要だが、その経費をどのように捻出するか、資金協力を如何にして求めるかが重要。

教育支援金で賄ってきた PPKIJ 活動費を、現地受託事業で賄うことを考えている。

#### （その1）中古コンピューター斡旋経過

4月に PPKIJ と協議し、6月の C.P.I.総会で提起された中古コンピューター公益斡旋のアイデアは、インドネシア諸大学の講師たちのコンピューター環境向上に協力しつつ、その見返りとして PPKIJ 本部・地域センターへの諸大学からの資金協力を得ることを考慮して考えられたもの。

（有）ブルーチップコンサルタントの協力で7月7日から収集作業が開始され、9月15日に PPKIJ 教育開発センターに253台を搬入したが、成果とともに課題もあった。

#### 成果

- ① インドネシアは中古コンピューター輸入禁止の国。しかし今回、C.P.I.からの公益斡旋が認められ、内務省・教育省推薦、産業貿易省許可および非課税許可証をとり、実績をつくった。
- ② 日本国外務省無償資金協力課は、上記実績を評価し、次回から壱千万円を上限とする事業支援を『草の根無償』で行うことを約束してくださった。次回は PPKIJ から申請を出す。
- ③ したがって、次回からは日本内・インドネシア内諸費用が公的支援される見込みであるので、当初の考えがより効果的に実現される見込みである。

## 経過における課題

- ① 国内ユーザーの保管の問題で、収集後に廃棄せざるを得ないものがあり費用がかかった。
- ② クリーニング・物理フォーマット作業が結構な手間である。
- ③ 8ミリカートン入り、4段積みでパレット毎にバインド、1コンテナ20パレットとしたが、この梱包過程で一台ずつパッキングリストを作成する必要があり、かなりの手間を要した。
- ④ 積み込み、国内通関で公的な協力がないたため、日本国内で港湾乙仲業者費用がかさむ。
- ⑤ インドネシア政府産業貿易省からの輸入許可および非課税許可証を得ても、さらに通関後に Finance Ministry の非課税許可証を2ヵ月後に得る必要がある。  
その間、一時的に銀行保証金を支払う必要があるため資金余裕が必要（あとで払い戻される）。

## 今後の課題

1. 大学からの PPKIJ への協力金は、結局は幹旋コンピューターに対する金額として計算されるものと考えなければならない。今回は Rp.1,250,000- / 台 の協力金を望んだが、(PPKIJ への寄付 10 台分を含む 253 台の幹旋に関するコストとの対比) 事前調査よりも協力金が下回り、今回は現地に設置してある C.P.I.教育開発基金にとって、Rp.90,854,000 (約 130 万円ほど) コスト割れを生じた。次回からは公的支援によりコストが相当に減るので、協力金プラスによりバランスを図れると考える。
2. 第一次作業所の PPKIJ 教育開発センター(Cianjur)からの運搬、受託先への引渡しの期間短縮、1ヶ月以内に内部故障の出た品物の交換方法、これらの作業の洗練化が必要である。
3. 現地港に到着後の保管中の結露が非常に心配である。通関処理期間を速度につき解決したい。現地日本大使館には、この解決に対する協力を依頼した。

## 今回のコスト計算 (幹旋コンピューター一台あたり。コストに対し戻入は△表示)

C.P.I.の日本国内での 253 セット (本体・ディスプレイ) に係る有償作業費	Rp. 261,590,000
インドネシア国内輸送費 9 areas @2,000,000	Rp. 18,000,000
インドネシア通関費用	Rp. 10,000,000
インドネシア内インストール・AC チェンジャー等諸経費 (幹旋可能 230 台)	Rp.8,800,000
243machine に係る合計	Rp. 298,390,000
C.P.I.から寄付を承認予定の 10 台分	Rp.△11,680,000
PPKIJ 本部に対する協力金	Rp.△176,000,000
ダメージ補填を後日受ける (17 台)	Rp△19,856,000
今回のコスト割れ額	Rp.90,854,000

コンテナターミナルで。天沼理事も立会い。



外傷・結露がないかを通関職員立会いで検査





## 資料④ インドネシア青年の雇用創出のため、現地政府・PPKIJ と協議中

民衆の職業を創り出す近道は、民衆に必要な専門職を増やすことだ。  
教育里子の卒業生からの要望も高い。

手始めにインドネシアで地方消防官専門職を確立するための技術教育のための日本政府との協働を、9月8日 JICA インドネシア事務所（統括官との協議）、9月12日日本大使館（佐藤経済協力局書記官）と協議した。（なお、9月24日、10月2日に外務省経済協力局の関係部署と協議し、消防職技術教育について ODA を活用し、雇用創設につなげるプランを進める方向で進めることになった。日本大使館と現地政府との間で、特別に追加 ODA として協議に入ったとの連絡あり。有望。）

C.P.I.の理念『貧困から育て上げた青年たちをリーダーとした社会づくり』へ向けて！  
民衆の手で管理する、民衆の生活向上のための山村開発モデルプロジェクトの夢が、  
いよいよ実現する。PPKIJ の専門家チームと卒業生たちは、張切っている。

C.P.I.は、PPKIJ—スマラン市から高地山村での『農民自身による山村開発』への農業技術・経営等能力開発プロジェクトについて、資金づくり・プロジェクトの進め方をアドバイス依頼されてきた。現在までにスマランの卒業生のうち 28 名がこのプロジェクトのためにスタッフとして参画することを決めており、他の地域の卒業生からも参画要請があがっている。

C.P.I.は会長小西が担当となり、世界銀行の Japan Social Development Fund（日本政府が世銀に調査・決定を委嘱している社会開発無償支援）による 2 億 4 千万円の支援を受けられるよう実現を図り、スマラン地方政府の特別チーム、PPKIJ スマランの能力開発専門家チームとともに提案書づくりに取り組み、本年 4 月世銀コンサルタントによる調査・報告作成から世銀本部の審査段階までこぎつけた。C.P.I.は、Mobilization および Monitoring を受託する予定である。

9月9日インドネシア政府 Ministry Rural Development で、スマラン市長・PPKIJ スマラン地域リーダー Mr.Daryono とともに、Director General の MR.Seman と意見交換をし、支持を取り付けた。これでインドネシア中央政府の必要な省庁すべての支持をとりつけたことになる。

C.P.I.としては、会の理念『貧困から育て上げた青年たちをリーダーとした社会づくり』へ向けてまた一歩の前進となる。



Ministry Rural Development で、左から山川理事、Mr.Daryono、Mr.seman、小西会長、天沼理事

# インドネシアの里子、ユリさんを訪ねて

インドネシアを訪問中一人の里子ユリさんを訪ねる機会を得た。

ジョグジャカルタ市の西約 30 km のところに小高い「メールの丘」がある。街並みはずれると、すぐに田畑が広がった。野菜畑の中にたばこ葉の畑が点々と見える。田んぼには黄色く色づいた稲穂が実っていた。直ぐそばで田植えの準備をしている風景は日本では見ることの出来ない風景だ。30分ほどで山道にさしかかった。馬力の小さいワゴン車に8人の大人が乗っている。思いきり排ガスをふかしながら車はあえぎながら登る。日本ならヘアピンカーブになるのだろうが、ほぼ直線的に道が切つてあるので当然坂道は急である。こんなところに家があるのかと思うほど山坂を登った。少し平坦になったところに大きな集落があった。

助手席のシゲット君が「ここだここだ」と言っ

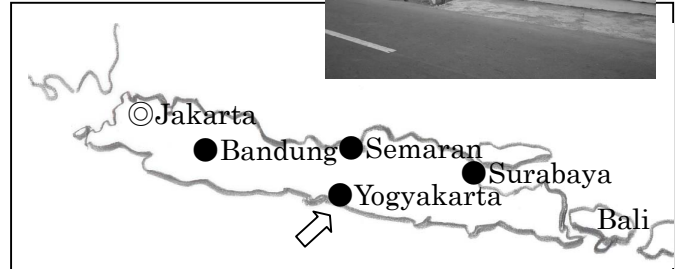
て彼女の家を見つけた。田舎にしては大きな家だ。(写真右上) 家の前に背の高い男が我々を待っていてくれた。彼女の義兄だった。

8人が車を降り立ったとき、ブルーのシャツを着た女の子が年老いた女性と一緒に笑顔で我々を出迎えた。彼女がユリさんだ。

彼女の父母は折り合いが悪く、いろいろあった結果、彼女と姉さんは叔父の家にあずけられたのだった。3年前姉さんは結婚をし子供も1人いて皆でこの家に住んでいるという。

彼女は今年9月から高校3年生で来年卒業する。彼女はバレーボールが好きだが選手にはなれないと言う。数学が得意で、大学に行けたらバイオの勉強をして高校の先生になりたいと目を輝かせながら話したが、ふと目を伏せた。なんとそばで叔母が「お金がかかるからねー」とぼつりつぶやいたからだ。実際、叔母の生活も楽ではなさそうだ。2年前に、学校の職員をしていた夫が亡くなり、年金だけではたべて行けないので、ベッドを作ったり、子供用の菓子を作って生計を立てている。

しかし、そんな不遇にも思える環境にも拘らず、



何故こんなにもこの娘は明るいのかと、愛らしく思えるときがある。彼女が話し、そしてその時に作る笑顔がとてもさわやかなのだ。

「この子は自分たちを喜ばせてくれるとても良い子です」と叔母が言った。「広いこの村でたった一人CP Iの里子になった。自分の誇りにしている」とも言った。

叔母は底抜けに明るく、しっかり者だ。そんな環境に彼女は育まれているのだろう。よく笑うし、よく話す。以前はガールスカウトに入っていたが、今は勉強に専念しているという。

毎日3時間くらい家で勉強している。コンピューターが好きで学校のコンピューター教室で学習している。10台しかないので、

なかなか自分の番が



笑顔かさわやかなユリさんと叔母さん

来ないらしい。

PPK I Jの毎月のミーティングにも参加し、何事にも熱心な優等生だ。

PPK I Jから“日本から里親が来る”と連絡を受けたときは、てっきり里親のKさんが来ると思っただけだ。

「日本らしいお土産もあつたらな」ちょっぴり残念と舌を出し、恥ずかしそうに微笑んだ。

わかれ際に「彼女はCP Iにとっても大切な財産だから、いい子に育てて下さい」と、言わずもがなことを言ってしまった。叔母は大きくなすいてくれた。本心いい社会人になってほしいと思った。

(山川洋一記)